

ロータリーとの出会い



横浜西 渡辺 哲夫

私がD氏に会ったのは数年前の「海軍東部ニューギニア戦友会」の時であった。各部隊毎に、再会を喜ぶなかであつて、ひとり離れて静かに座っている老人があつた。彼の顔に刻まれた深い皺、そしてじつと耐えているような様子。私は老人のなかに、何か我々とは違ったものを感じた。

「あなたの部隊はどこだったのでですか」と私は尋ねた。「私はブナで玉砕した横五特(横須賀第五特別陸戦隊)の機関科の下士官でした。一カ月の激戦のすえ、ついに司令部も包囲され、敵は数メートルまで迫ってきました。私は通信科のモーターの係でした。最後の決別電報をうち終り、電信機を破壊した時に、敵戦車砲で片肺を扶られ、捕虜になりました」。私は彼がどんな風にして捕まされたか、又豪軍の日本軍捕虜に対する態度を知りたくなり「もし差支えなかつたら、後日、お話を伺いに行つてよいでしょうか」と言つた。老人は眼を輝かせ、「どうぞおいで下さい。何でもお話しします」と答えた。数日後、私は東京小山台の彼の家を訪ねた。

彼は重傷のため動けず、豪州兵に捕まり、応急手当の後、豪州の病院に送られ、手術をうけた。その間、いつ殺されるかと、それだけを思う毎日。しかし、日本軍とは比較にならない丁寧な看護をうけ、傷はメキメキよくなつていった。

ある日、大勢の豪州人が病室に入ってきました。いよいよ辱しめをうける、どうしたら日本軍人らしく死ねるか、舌を噛みきろうと決心しました。ところが、その人達の顔付はけわしくはなく、温かい言葉が流れてきたのです。——あなた方は立派に戦つて、負傷して捕虜になりました。少しも恥ずかしいことではありません。私たちはお見舞にきたのです。早く健康をとりもどして下さい。私たちはロータリークラブの会員です。あなた方に対して、憎しみも何もありません——「今いる彼の部屋には、歯車の小旗があつた。

「私はその後終戦に至るまで、しばしばあらゆる面で、ロータリーの方々にお世話になりました。その間、私たち捕虜は、せめてものお礼に木工玩具を作つて、YMCAに贈りました。いよいよ内地に帰国する時も、皆さん見送りにきて、最後まで私たちを励ましてくれました。豪州のロータリーの方々は私にとって命の恩人ですが、なかなかこういう事は、やたらと人に話せません。私はどうしてもあ

なたに聞いてもらいたかつたのです」

聞き終つて、私は国境を、また怨讐を越えてのロータリークラブの活動に、言い知れぬ感動を覚えて、彼の家をとにした。

私の「ロータリー」との出会いはその時であり、そして今、私は入会四カ月のロータリーアンなのである。

(神奈川県・小児科医)